



奇
話

不
聖
話

一

古今奇蹟後編

聚珍話

浪華書林

稱觥堂
揚芳堂



い

近頃乃者三十年前。國字小説數十種を
 戯作て茶話み代也。千里信子を伴又執て
 美紙九種を撰て書林に換て是は。廿
 五年早なりぬ。其の如き者如く花為
 あり。市小徳也。山手橋みトを賣り。字錢
 響き。書遊又遊する多し。去津去津
 浪弟下。過る。書林予に縁て其體格を
 おむ。り去點して撰不其才あり。今を
 乃者其下。後と。此に過家又寄言。筆の
 中より。冊子ととり。海。所魚と拂ひ興へん

○英紳帝後編序

四

として。を操基を必し。同漢を恥て。此無る
 兩阿り。そのを奪る。つめ。一。交。亦あり
 一。親。其。其。首。其。中。の。た。ち。の。る。徒。は。是
 是。と。そ。一。方。是。重。の。賦。也。号。魚。也。守。屋
 乃。連。不。言。の。意。に。意。如。く。既。及。の。理。も
 よく。展。也。り。其。來。弓。の。故。半。一。了。任。代。の
 傳。奇。を。整。也。形。色。其。人。を。得。す。と。と。を
 覽。也。白。蒙。乃。卷。ハ。心。様。林。嶺。の。嘉。題。を
 傾。り。占。卜。の。前。教。不。固。家。子。を。從。て。女。教
 の。名。實。全。也。ん。と。と。を。大。市。ま。し。心。唐。經。の

古今奇談 繫野話物目錄

近路行者 著

子里治子 正

第一篇

雲魂雪情を告て太平紙誓ふ活

第二篇

守屋長次誕生伝草莽又引活

○英州帝後編目錄

四三

第三篇

紀の園守が靈弓一旦白鳥に射る活

第四篇

中津川入道 山伏塚を築く活

第五篇

白葉の方猿掛の岸に怪骨を射る活

第六篇

素御宿人二見と唐船又携る活

第七篇

屋月二部兼舎龍窟又就と活

第八篇

江口の遊女活信成恨と珠玉を沈る活

第九篇

宇佐美之津字遊船と飾と歌と平る活

○英州帝後編目録

四四

以上九篇

古今奇談繁野話第一巻

① 雲龜雲怪を語て久きを誓ふ話

雲を體と水を心と。平生消へはく煙くの念。世塵よりなれ桑
門の身守。只恐なくは海へさひ。往所のは蹟。飛鉢の遠地。海へ
がうて。精進の助もなさん。とひら。沙門のま出。程らる。れ。和季の法衣
をよ。移りつ。かり。ぐ。大永の物乃。春。山。や。夜。と。共。よ。出。て。林。風。と。海。り
期。く。唯。踏。よ。わ。わ。つ。る。清。く。を。眺。望。し。て。富。士。の。麓。に。過。り。た。り。あ
ろ。り。口。の。登。降。の。志。中。な。り。つ。ぐ。ま。後。の。ま。の。何。れ。も。あ。ひ。や。り。て。あ。り。く
ま。か。う。消。る。る。路。の。曉。昏。の。空。の。雲。の。空。の。目。小。軟。く。な。れ。際。て。朝
の。月。雲。よ。こ。た。法。を。も。と。く。夕。か。り。雲。の。あ。た。め。く。も。ま。ふ。は。あ。り。け。さ。此
寺。の。傍。侶。よ。知。音。あ。り。て。數。日。の。勞。を。休。め。夜。此。寺。の。浮。屠。の。五。層
よ。也。に。伴。像。の。上。よ。中。と。め。の。思。は。な。れ。あ。り。て。あ。り。く。も。人。の。除。む。た。き

○ 英洲南後編卷之一

あの操窓かゝぬ。懐べきもの操よ。と。秋。涼。の。色。を。讀。誦。ふ。け。よ
か。め。り。さ。る。な。れ。世。と。な。り。る。ん。地。に。雲。路。迷。き。と。く。も。か。人。の。心
に。け。や。な。れ。る。上。弦。の。月。中。そ。ふ。高。々。作。而。を。う。り。て。恐。る。を。脱
かり。取。回。か。そ。こ。ろ。と。か。く。こ。ま。く。守。小。月。の。を。ひ。ん。高。岸。の。宮。へ。入。と
だ。う。か。う。だ。不。と。無。休。拂。ひ。眼。を。僅。々。塔。の。頂。よ。物。お。く。て。終。く。や。休。迷。法
陽。の。命。と。か。ち。そ。う。り。西。方。に。使。し。て。か。い。よ。盡。く。身。む。め。り。と。七。南
より。へ。直。小。よ。の。雲。路。掃。は。い。う。の。雲。路。は。す。少。て。絶。が。ら。な。う。わ。き。を
ぬ。ら。い。海。を。よ。ぼ。て。南。よ。出。ま。は。海。を。よ。消。さ。れ。ぬ。を。向。す。れ。り。な。り。な。り
大。旋。た。旋。の。風。よ。吹。ち。ぐ。さ。れ。い。雲。水。の。固。あ。り。う。つ。て。衆。雲。と。共。よ
一。片。づ。て。よ。も。そ。の。停。と。と。ぬ。る。世。の。中。よ。雲。を。な。り。く。も。あ。り。と。是
い。づ。し。よ。落。雲。村。雲。と。お。お。く。ま。う。ん。人。の。あ。り。の。こ。ご。め。さ。よ。我。と。丹。波
た。郎。と。名。の。少。立。身。像。中。よ。も。あ。り。て。足。ゆ。ら。が。り。人。の。看。て。取。座。の。操

かり紙。徳堯禹より厚しと古人の譽りたりと。あひ出る付くは差
 ありて汗の志を流すやん。天の戸あきて朝は霞は。只そをて我日の出の
 所をわたりたり。づつてはさしてう着るを。霧の似を飛ひ。何れ宿して岫
 をあつたるありや。曉のまがて山かづくとみぢありていつて定まはし。さなと
 こけり人の目も好景ありん。西小の山領に衣きては單とらざるは
 人の足成健し。赤いれ隈に深く聚まば雨うと疑ふれ。あらく六甲と裁
 まげ日和うまうん。海上に陰ては漁利を言と。或射は少赤へを
 りづつて遠方のぬし無し。攝の空に陰晴も夏の日小方の雲展げれば
 赤あふふよ授て急雨をゆる。凝のまほさる林のありと。さうむらりて
 衆生の心いさあども。黒雲に上り晴くしては遊船の楫を回さむ。煙や
 のうよ三日霞へは厭りて。口惜のまら。秋の空申のほき敷く。こ
 二ひ。風のまら。月々の影は。月をみてかすこと。雨よさるるいて陰



己よりゴロ耐の極悪人乃 邪路へ入る。詩客の宿題 歌人の擬作空しく腹
 中へ朽しめ 晦々ならずして 月よと世の字を流しむるを 衆ふくそ也
 とも 風を驅きて 付来し 惜練は ばやうり身の 我より 由がれん。考らうき
 早風よ へは 伐 烟 障いと ざらんと。人よ 是とも。初雲より 月の色や
 かろも うらさた。雲の 集る 交を 雲謁とて。月の色も 赤きやまを 蔽と
 へ 俗に 混をも 分別り。又 我より 姓の 地 黄氏の 邪族とて。月よとを 見
 一 深地と こそ 人より 我より 邪から 伐。世の 諸人の 大空の 一 偏の やうに なる
 もとど。其 氣 圖入る 遠いて。大空氏の 其 徳を 考ゆて 久らぬ。蒼天 昊天
 昊天 上天と 四季の 名の ことども みどり の 名かまらぬ。其 形 深くして 限
 りを 不せん。我らに 在地より ハ丁と 量らねども。所 定め ば せむ ければ
 亦 所 定 人 ち かく ども 風 形 かく ねども 吹 行て 吹く くらん。我の 一日の 間 小 消
 貞 定 まら ず 一向 日 の なて ぬ きた 照て 日本 晴と やらん 所 耐の 一 畫

とていへば風吹をぬきし。水氣もども吹くもふらふとの風もいふよう。
少風月風とて吹あそこの横ざうらう遠くまうていほう。真風を西
南の山りと同より。海も吹たてはるま一字も吹送る。其とあてはるま
候し。風雲の初四方よりいふ正なり。斜から風強けり吹ゆ。風
は端から四方より吹風候。風も名はけ。吹たてはるまのふらふら
うたふす。雲や雲雨風煙の画も名はけ。吹たてはるまのふらふら
勢をぬぐんとて消小白粉をを活して。口を吹らるまに候とるに
を吹中とて名はけ。細くをぬぐんと吹やば羅章の傳とていふ言をま
画の雲れ冬蹄とるとハ雲霜より人せし候とるよう。我ががうら
とはるま雲より人しと吹くうらうら。今あそとままの雲ををを
ふらからまをる。白く也の流つとて平長と時成りく。洋中雲候
氣たふれた引立て。福利海は流ら人文林をうら。浪をき東風を

○英州帝後編卷之一

ふく。我らぬぐれば雲も瑞油をひらぐ。若し四方に立るとしてた
へど奇峰候出。静から世の觀とて久厥時とてまうとてなうとて
のちに候とて四方ふるまをまら。沙門をさうてとて雲水のま
とて我を揚はわめて世妙なり。服部の莊嚴なり。殊くも雲
魂の證を國て人しと吹くうら。同てい。漢の四方に懸る雲の昔より各其各
あつとて初てぬぐまねた。ものまを白雲とてむじ公空なる。妄言聽人
と安聽云玉りん。免しと角しとまをてりり。

② 守屋の屋敷生を早莽し引話

敏達天皇の御代疫疾より流り。蒼生を害とるく少なり。い時
お部の守屋の長。又連の職に在て諫言を言職と。之減るなり。國
言を遊りて曰。凡善教の世界より紗あり。い國の善政は其國に付き。彼
若教い國より其のい。貨を交場とるがて。互ふれ用いて取なりとて

地を易ていひるべき事あり。仍まざる風あり。我國上なる宜し。然れ
樂ある人。新羅百濟王化し帰附してより。漢土の禮樂書に付人々付
りて。堯舜のいれ子述ぶる其緒を用ひり。然れども。礼樂の世代
より壹せざるをねど。文武周公復生せども。時宜し。後土を
風土習俗の異なるを以て。近き伴國の教付奉りて。致信する。あ
ましく。其國遙し。隔りて。西夷あり。其土風の若くをさす。先朝
ありて。中臣の鎌子。愚ふらる。尾輿等。疫疾の事より。つて。奏して。平ら
本朝より。百八十九社。櫻の汁ありて。祭る。れ。天ト平なり。保れ
このりて。夷神を用ひり。彼伴の夷狄のは。施を好む。世は。驗は。其
皆。夷の。叔。滅を。は。めて。生。成を。收。む。漢土の。上古の。君。皆。長。壽。し
して。百。歳。より。す。伴は。其。地。へ。て。新。代。を。修。む。漢土の。伴。入。る。の。茶。の。海
書。雅。頌。の。音。あり。て。万。民。自。ら。多。福。なり。我。日。東。に。儒。教。を。さ。す。い。茶



人の量あやうひらはく壽しゆの命いのちを長ながくし。今夷國いこくの神を信まをし本國ほんこくの神を信まをし
しどしど中人ちゆうじん困こむ神かみ怒いかりて疫疾えきしやくと致いたすをうんと。朝廷てうていははく詔めいを
出だす。弊へいを救たすふの激論げきろんかりりとも。今日けふ其その言こと成なり用もちひ件けんをちりぞけ國
津つ神かみに謝あやまり玉たまひ。乃すなはち民安たみやすきはしひ宸襟しんしん樂らくのつるべとぞ。凡たゞし
時ときに馬ま子こ文ぶん長ちやう。又またに豊日とよひ王わうの長子ちやうし。既すでに戸こ王わう子し。幼こ年ねんかたも聰明ちゆうめい
人ひとの秀ひでるるが。そとんで守屋まもりやに對むかへて云いふ。又また連つらの言ことを成なり用もちむといふを
ゆゑ。とるも佛ぶつは夷い狄ていの法はふ用もちむべう。げといふこと。いふと。はく考かうへる
に似にたり。我わが邦がくに上古しやうこより遷うつて来きり。神武かみむす皇みま西にし鄙ひんより起たりて宇内うないを仰あやむ。
漢かん土ど舜しゆん王わうかるもの諸馮しよほうに生なれ東夷とういの人ひと。文ぶん王わうに岐周きしう聖せい夷いの人ひとを
とも。皆みなは彼かの土どに後世こうせいに垂たり。佛ぶつは洋やう飯はん國こく王わうの子こ。其その國こく漢土かんどに濟たり。
漢土かんどと我邦わがくにとはふたつに南みなみにあり。世界せかいの中國ちゆうこくにあり。又またに漢土かんどの
別わかるる。こゝに漢かん者しやはあつて其その用もちひらるるあり。佛ぶつ教きやうもかゝる用もちて



に寄奉に祀され片岡かりの西よりやと川あり。そ子は附は興寺よ
去て經營をころぐる方と綴行して希とかりん。は亦成て長と
又のひ。たたし顧ては小衣舎成場へしと命を従ふ衆人飢人の
傍に來てはて云。飢人上の重と受。搦政に衣舎成場へ既し村の
長に命せり。今飢人へしと云。飢人強て起坐して云。縁者飢て自力
買てはよつたはも。いまは投あつるの舎成りしやうしていつははかうよ
今身びでさば魚なりとも。大公目一人の飢定をこそ衣舎成場あり。
天下の飢人いづくありとも。いづくと行は衣舎を始と成得べ
き。是近きを親しく遠き疎く。公成と久まふとあうとぞ。衆人不興
して善と。とるいらぬとありて其極をりは。天子奇特のしといはれそ。
河内を下しむりそ。飢人受け。其るる亦成先よとるは人情の常と。
況や執政一人のかり億万人のかりを。裁は近き飢人と惠は心

河を以て蓋し三國の目又其なるらんや。仇人地は我に非して長は伏を。若
子宮に敗れせむひて。其やけ仇人元たのりのみありと。只そ仇
殺まえて傷べしとふよ喉と

死んでおるや片岡山に飯に飢てぬせる其人哀をや成し
人としてそりあふし。邑長とぞ衣舎成あてて仇人生久
まらざるおとく。宿人若子の勝味をのりて仁徳と悔と。仇人世に有
らざる神として友人は對してのくとやん

せらるる民の小川はた人をて我大君のみそるいとれを
使啼て此より啓と。されしと異人かりと。まわて人をて仇人を
るあふし。使ある所ゆる衣と其地よとめて其人の親もす。とるま
小坂は出所の頭まんとくは思と其不をのりえり。境をたてて道
遙むる赤とほれたれば。も思の親もす。伊と文とてたれ傍に過

○英州帝後編卷之一

と附らり。経たてたれ難はとる人まら。群るる衆人の親をかどて食
をわらひ。附る衆人ととて衣とあふ人。休逐に親とん。どたの具と
ゆさせん。公安らなるとて去家。流と巧多面と相射し。語てそ前日
攝政王片岡ゆて仇人をとるまんとく。諸有司とるんとて。皆つと
つて大卿の料を減して。今日よりゆる衣をさ法せしとる。皆親と
よとつら。小坂是より過し。渡海しゆるとる。親に射して若子の仁とと
らる。親教表と云。攝政王仁の國を記し。事と死骨よ及ぶ。民亦くそ
細とくけん。我はむらまらんか。とれ。我今日國の命成とる
其後の敵て世とのるを回つ。後藤戸王典記せしとて。傷と傍て
止と。身を任てい里民と付来し。彼に殺して水成放ら土と穿き利益
とる。と少のり。皆人里よ出むり。とて。山中老境よ
應せり。性と若ひ。百葉の長壽と保ら。皇極の朋よ。とて。藤戸乃

